

アイヌタイムズ

第12号

アイヌタイムズ第12号(1999年12月20日発行)からアイヌ語抜粋
著者: 横山裕之

東海村 オッタ 臨界事故 アン アルウェネ

(アイヌ イタク [アイヌ語])

1999 パ 9 チュプ 30 ト タ、茨城県東海村
ウン 株式会社 ジェーシーオー (JCO) 東海
事業所 オッタ JCO ウン ウタラ、オロ ウン
ウラン ル ワ アン 硝酸溶液 沈殿槽 (ウラ
ン ア・オマレ ワ ア・ラッチレ ウシケ) オロ
オマレ アクス、ヘマンタ クス ネ ヤ カ ア
エラムペウテク コロカ 臨界 アン アルウェ
ネ。

オロワノ ネワアン ペ アン クス オロ タ モ
ンライケ ウタラ レン ネ ワ 放射線 セコロ
ア・イエ スルク カラ ワ オケレ。

ネワアン ペ 被爆 セコロ ア・イエ ルウェ
ネ。

ウトウラノ 病院 オルン ア・アフプテ ワ、ア
コカラ カラ コロ オカ。

オカケ タ ネ ウシケ オカリ 放射線 ポロ ク
ス 科学技術庁 アナクネ 事故対策本部 カ
ラ ワ マク イキ・アン ヤク ピリカ ヤ カ
ヤイコシラムスイパ。

政府 アナクネ タン ウエンペ エラムサラク
クス 政府対策本部 カラ ヒネ、小淵総理
本部長 ネ イカシパオツテ ルウェネ。

東海村、茨城県 アナクネ、ソンノ ハンケ
(350 メートル) ウシケ タ オカイ ペ ネ ヤク
ン キラ ヤク ピリカ、トウイマ (10 キロメ
ートル) ウシケ タ オカイ ペ ネ ヤクン チセ
オンナイ タ オカ ヤク ピリカ、セコロ イエ

東海村で臨界事故が起き ました

(日本語)

1999年9月30日に、茨城県東海村の株式会
社ジェー・シー・オー (JCO) 東海事業所で、ウ
ランがよく溶けている硝酸溶液を沈殿槽(ウラ
ンを沈殿させる場所)に入れたところ、どうい
うわけだか、臨界が起きました。

そのようなことがあったので、そこで働いてい
た3人が放射線という毒に当たってしまいました。

それは、被爆と言われています。

いっしょに病院に入れられ、病院の手当を受け
ています。

その後も、その場所の回りの放射線は大きく、
科学技術庁は、事故対策本部を作って、今後
どうしたらよいかと考えました。

さらに、政府は、この悪い事態が心配であった
ので、政府対策本部を作って、小淵総理がそ
の本部長として指令を出しました。

東海村、茨城県では、とても近い(350m)ところ
ならば、逃げた方がよいですよ、遠い(10km)と
ころならば、家の中に居た方がよいですよ、と
いいました。

ルウェネ。

オロワノ 政府 アナクネ 放射線 ピリカノ エラムアン ウタラ ヤイトウナシカ ノ ウウエカラ パレ ワ、ネン ポカ イキ ワ ネ 放射線 イサムカ クニ ウコラムコロ ルウェネ。

10 チュブ 1 ト タ 政府 アナクネ 放射線 ピリカンノ エラムアン ウタラ イエ イタク ヌワ JCO ウン ウタラ 沈殿槽 オカリ アン ナム ワツカ サンケ ルウェネ。

アクス、核分裂 キ エウエン ワ 臨界 イサム ワ 放射線 ポン ルウェネ。

ネ ウシケ タ オカ 日本原子力研究所、核燃料サイクル開発機構 ウン ウタラ 放射線 ウワンパレ ルウェネ。

ネロク ウタラ アナクネ 放射線 ピリカノ エラムアン ウタラ ア・ウワンパレ プ ヌレルウェネ。

放射線 ピリカノ エラムアン ウタラ イエ イタク 政府 ヌワ 放射線 ポン クス ネワアン ペ ア・エラムシンネ ルウェネ。

タン ペ クス ネロク キラ ウタラ ネ ヤクン ホシツパ ヤッカ ピリカ、チセ オンナイ タアン ウタラ ネ ヤクン ソイネ ヤッカ ピリカ、セコロ イエルウェネ。

科学技術庁 アナクネ 10 チュブ 3 ト ワノ 原子力等規制法 セコロ ア・イエ イレンカ アニ オヤ 事業所 オッタ ウエンペ ウワンパレ ルウェネ。

オヤ 事業所 オッタ ウエン ペ イサム クス 政府 アナクネ タネ ピリカ セコロ イエルウェネ。

臨界 イサム クナク ア・ラム ウシケ タ 臨界 アン アルウェネ。クス ネワアン ペ ソンノ ア・エラムトウイ ペ ネ ルウェネ。

JCO ウン サブネ クル、オロ ウン ウタラ ア・エヤム ペ ソモ ピリカノ エパカシヌ クス、ネロク ウタラ エタラカ イキ ワ タン ペ アナルウェネ。

テ ワノ ネノ アン ウエンペ イサム クニ ア・エトコイキ クニ プ ネ ナ クナク クラム。

それから、政府は急いで放射線をよく知っている人たちを集めて、漏れた放射線を何とかしてなくすように相談しました。

10月1日、政府は、放射線をよく知っている人たちが言っていることを聞いて、JCOの人たちは、沈殿槽の回りにある冷たい水を取りました。

すると、核分裂が起きづらくなり、臨界は止まり、放射線は少なくなりました。

そして、その場所のそばにいる日本原子力研究所や核燃料サイクル開発機構の人たちが、その場所の回りの放射線を調べました。

その人たちは、放射線をよく知っている人たちに調べたことを聞かせました。

放射線をよく知っている人たちが、言っていることを聞いて、政府は、放射線が少なかったので安心しました。

それで、逃げている人は、家に帰ってもいいですよ、家の中にいる人は、外に出てもいいですよ、と言いました。

科学技術庁は、10月3日から、原子力等規制法という決まりによって、他の事業所でも悪いところを調べました。

他の事業所は悪いところはなかったのので、政府は大丈夫だと言いました。

臨界が起きないと思われたところで臨界が起きました。そのことは驚くべきことです。

ジェー・シー・オーの指導者が、きちんと職員に大切なことを教えなかったため、その従業員が、いい加減なことをしてしまったので、こういうことが起きました。

今後は、こういう恐ろしいことがないようにしなければならぬと私は思います。

アイヌタイムズをご購入していただける方がお知り合いでいらっしゃいましたら、お声をかけていただくと大変うれしく思います。

購読連絡先: 〒055-0101 北海道平取町二風谷 80-25 萱野志朗(宛)
購読料: 1500 円 (4 号ごと／アイヌ語版のみ)
2300 円(4 号ごと／アイヌ語版と日本語版)

読者からの投稿募集:

(連絡先): 〒047-0033

浜田隆史(宛)

北海道小樽市富岡 1-32-136

電子メール: otarunay@yahoo.co.jp

ウェブページ: <https://otarunay.at-ninja.jp/taimuzu.html>

注) アイヌタイムズの著作権は、アイヌ語ペンクラブにあります。

注) 1. 赤字は、アイヌ語です。

2. 赤字のイタリック文字は、主に日本語由来のアイヌ語外来語です。